

# ダムは不要か



新 壽夫\*

長野県の田中知事がダムに頼らない治水ということを言いだし、物議をかもしている。

最近のたれ流しの公共事業のことを考えればもう手を挙げて賛成というものから、そんなことはどだい無理な話だから始めから言いださない方がいいというものまで色々だが、多少感情的な議論になっているようにも思われる。

私はダムや治水のことについては全くの門外漢であり、何の予備知識もないが、一市民としてはこの知事の発言には考えさせられるものがあるように思うので、思いつくままを述べてみたい。

黄河の水を治める者は国を治めるといわれる中国においては勿論のこと、我が国においても、信玄堤の例にもある通り、国力の充実のためにはまず川を治め農業生産力の向上をはかることが肝要だということは、古来認識されてきたところである。そのため時代時代の技術水準に応じた治水工事がなされ、現代に残る設備にも充分機能するものがあるが、それが自然の中に溶け込み、我々の心の中の風景の一部にもなっている。

我が国で人々の生活や生産活動の重要な舞台となっている沖積平野をみても、これが形成されるまでには、気の遠くなるような長い時間と膨大な量の土砂の移動があったはずである。この変動の末期に人類が現れ、流水や土砂の動きに一定の方向づけと秩序を与えようとして、営々と努力を重ねてきた。

始めは弥生時代の遺跡にみえるような小規模のものだったが、時代が下るにつれて大規模なものとなり、現代では自然の景観を変えてしまうこともあるほどになっている。

この動向をみていると、治水工事というものは益々進行し、規模範囲において無限に拡大していくものなのか、それとも一定の限度があり、あるところまでいくと現状の維持メンテナンスが主体となり、いわば平衡状態に達するものなのか、疑問に思

うことがある。あらゆる水系あらゆる河川に人工の堤防人工の河床を設け、SFの世界にでてくるような山川風景を好ましいと考える人は少なくないはずだし、またその必要性もないから、治水工事にもある一定の限度があり、どこかで一種の平衡状態に達するものではないかと思う。

しかしその平衡状態とはどのような段階をいうのか、ということになると議論の分れるところだろう。

近代生産社会の成立する以前ならば工事の規模も小さく、現代社会にあるような経済の論理の優越ということもないから、治水工事のコントロールも比較的容易だったはずである。しかし巨大な生産力の機構が成立し、経済の論理の優越する社会では、純粹な治水目的以外の要素が加わり圧力として作用してくるような気がする。

話が少し脇道にそれるが、新幹線をフル規格で延長する必要があるか否かの問題がある。マスコミの報道などではこの問題は、地域経済の発展と地元住民の要望というかたちで取り上げ議論されることが多い。しかし、この問題には現代社会のあり方が深くかかわっているように思えてならない。

新幹線建設というような巨大プロジェクトが一旦完成すると、それに応じた組織それに応じた物流が成立し、これを変更するとか廃止するとかいうことは、社会の存立の基礎そのものに影響を与えかねないところまできている。単純に比較はできないだろうが、冷戦末期に現れた産軍複合体のようなものかも知れない。そこでは、適正な防衛力の維持という本来の目的を離れて、一旦成立した組織の維持ということが、圧力として加わってくる。

現代の土木産業は巨大である。特に地方においてはその比重が重く、場所によっては人口1,000人に対して一社が存在するところまできている。その意味では、土木産業は我が国の基幹産業の一つであることは間違いない。

この土木産業維持のために、公共事業ひいては治水事業がゆがめられているとまで言うのは言い過ぎ

\*新壽夫法律事務所弁護士／(財)砂防・地すべり技術センター理事

だが、多くの国民がそのあり方について疑問をもつようになっていることは確かである。その結果、都市住民の目にはたれ流しの公共事業として映り、地元住民には自分達の生活とは無縁な事業として映り始めているのではないだろうか。

ではこの状況を克服し、国民的コンセンサスを得ることのできる事業とするには、どのような方策があるのだろうか。

そのためには、公報活動の徹底ということはず最少限必要なことであろう。誰の目にもその必要性が明らかだという事業は沢山あるが、工事の対象範囲が広がってくると、何故そのような工事が必要なのか、部外者の目には分かりにくくなっていく。

日本人はタックスペイヤー（納税者）としての視点が欠けている、とよくいわれる。これは我が国の従来の税制が、全く税金を負担しないかそれに近い層の存在を許していたことにも関係がある。このような社会では、国や自治体の支出については、自分達の負担にならないからどうしても無関心になってしまうのである。しかし消費税をはじめとして大衆課税が広く行われるようになると、納税者にそのような負担をかける税金は何に使われているのか、という問題が広く関心と呼ぶようになることは、当然予想できることである。そこでは、いわゆる行政のアカウントビリティは今以上に厳密に求められるはずであり、公共事業にはその影響が特に大きいように思う。

とにかく、工事の必要性を適切なメディアにより明確に訴えることは、まず出発点として必要だろうか。

次に考えられることは、地域住民に関心をもたせ、その必要性の判断に参画させることである。これは極論だが、現在の地域住民は公共事業というものはタダであり、自分達とは関係のないものだと考えているフシがある。戦前はもとよりのこと戦後のある時期までは、公共事業には地元市町村の費用負担という問題があり、どうしても必要なものしか手をつけられないという状況にあった。

私の経験でも、戦後六三制の新学制が敷かれ新制中学の校舎が必要になったが、予算がなくて建てられないということがあった。村の有力者が木材を寄付してようやく建てられたが、このような状況のもとでは地域住民の費用負担という目に見えない手が

働き、事業の必要性の順序が選別されることになる。ところが地元の費用負担が全くないというシステムの下では、この目には見えない手が働かず、厳格な必要性の検証がおろそかになり易い。

もっとも費用の地元負担といっても、事業の種類により差異があり、文化施設などの公共建物・道路・治山治水事業などの区別によりその度合は異なるであろうが、地元の費用負担というシステムによるか否かは別として、その必要性について地元住民ないしは国民の納得の得られるシステムを構築することは是非とも必要なことだろう。

その次に必要なものは環境保全の問題である。これも極論だが、最近の土木事業は自然を治しているのか壊しているのかよく分からないなどと言われることがある。誰の目にもその必要性が明らかな工事しかやれないという段階では、このような問題はあまり起こらないが、何のための事業か部外者には分からないような工事にまで予算がでるとなると、当然この問題が起こってくる。

治水事業についていえば、大規模工事にも勿論問題はあがるが、村の小川の整備などにも問題があるということである。今、日本中の村の小川はコンクリートの壁にコンクリートの底という、一種のコンクリートでできた樋のようなものになってしまっている。これには自然の植生や小動物を死滅させること、水の浄化能力を低下させることなど色々な問題を含んでいるが、問題はそれが農地以外の小川にも及ぼうとしていることである。

日本中の水田およびそれに関連する水路は、農業基盤整備の掛け声のもとにその大方がコンクリートの樋になってしまっているもので、これについては如何にして自然を取り戻すのかが問題である。しかし最近にない気になるのは、農耕に直接関係のない山間や原野の小川にまでコンクリートの樋化が及ぼうとしていることである。これは、コンクリートの樋化にかかわる産業がシステムとして確立してしまい、歯止めがきかなくなってしまったのではないかと思われるフシがあるし、他方では地域住民の環境に対する関心の低さが、これを許容しているのではないかとも考えられる。

ダムなどの大規模工事で私が気になるのは、景観の保護と水生動物の保護の問題である。ダムの建設は道路の建設ほどではないが、景観上あまりにも無

神経だというものを見かけることがある。大規模工事の前におこなわれる環境アセスメントの調査でも、動植物の保護という観点が主で、景観の保護ということは軽視されているのではないであろうか。

水中動物の保護については特に溪流魚のことが気になるが、現在のダムでは魚道や魚梯を設けその対策を講じているものは希れである。私は溪流釣りが好きなので時々山間の小河川を歩くが、少しの工事で魚道を設けることができるようなダムでも、これを設けているものは殆んど見かけない。人間の都合によいダムなどを造るのだから、先住者の溪流魚に配慮するのは当然であり、またこれが豊かな自然豊かな心に通ずるものはずでもある。

最後の問題は水系全体のグローバルな治水対策の問題である。我々は治水事業というتماずダムの建設・護岸工事などのことを思い浮かべるようになっている。しかしこれは治山治水事業の一部のほずであり、他に森林の育成など重要な分野のあることは勿論である。森林は緑のダムであるといわれ、戦時中の森林乱伐により終戦後発生した大洪水への対策として、その育成が叫ばれた時期があった。しかしその後の工事技術の発達・公共事業費の膨張などもあり、土木事業に較べ影がうすいように思われる。

私は全くの門外漢であり、森林のもつ保水機能・樹種によるその差異など、これを制断するのに必要な知識を全く持ち合わせていないので正確な説明はできないが、治水対策としての森林育成が不可欠なことには異論はあるまい。江戸時代水田を拓くのにまず上流に植林を行い、必要な水を確保したのち新田を開発したなどという話はよく聞くところだが、これから見ても日本人は森林と水との関係をよく理解していたはずである。林野行政の独立採算性確立の掛け声のもと、最近まで水源地の広葉樹を伐採し杉の幼樹に植え替えることがおこなわれてきているが、これなども林野行政と治水行政の連絡の悪さの一証左であるといえなくもない。

とにかく、鹿を逐うものは山を見ずの例ではないけれども、ある分野に精通しこれに打ち込む者は他の分野のことをあまり考えないことがある。土木技術に携わる者がこれに該するというわけではないが、最近のダム建設などの治水工事の盛行を見ると、それに較べ水源涵養林の育成は軽視されているように感じられてならない。

私は治水のためのダム建設が不要だなどとは毛頭考えていない。冒頭にふれた長野県知事の発言も、ダムが全く不要だと考えているのもあるまい。ただ最近のダム工事についてその設置目的が必ずしも納得できないのもあること、環境保全など他の考慮すべき重要な要素もあることなどを考えれば、ダムに頼りすぎる治水対策には問題があるということではないだろうか。このように考えれば、知事の発言にも問題提起として十分に考慮に値すると思う。

田中知事の発言についてはこの人の個性もあり、賛否侃々諤々の議論があるが、このように考えれば戦後体制の一つの見直しとしての意義があり、前向きに捉えるべきではないだろうか。